

変動の時代だからこそ 変わらずにあり続けること

～コロナ禍でのボランティア・市民団体との関係～

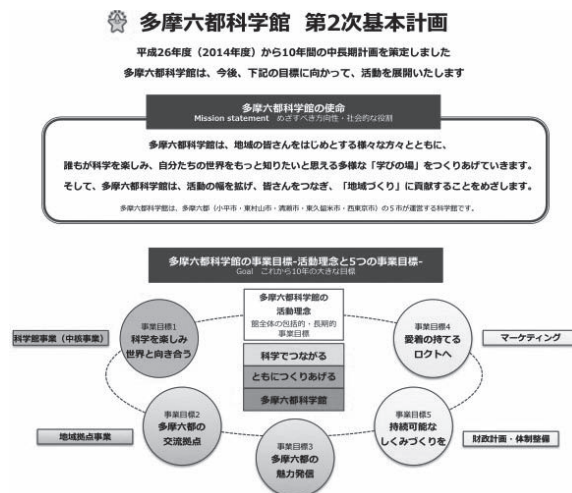
多摩六都科学館 パブリックリレーションズグループ 主任研究員 原 朋子

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、多摩六都科学館も2020年2月末からの臨時休館にはじまり、活動再開してから入館者数・プラネタリウム観覧者数の制限、体験教室の実施方法の変更など、数々の影響を受けてきた。しかし、科学館の活動以上に大きな変化に見舞われたのは、科学館ボランティアや地域の市民団体の活動で、それは現在でも続いている。ここではコロナ禍で見えてきた、ボランティアや市民団体の活動についての地域博物館の存在意義について考える。

多摩六都科学館の事業の2つの柱

多摩六都科学館は、東京都北多摩エリアにある5つの市（小平・東村山・清瀬・東久留米・西東京）が共同で運営する総合科学館である。当館の使命として、誰もが科学を楽しむ多様な学びの場であることと、活動の幅を広げて人々をつなぎ地域づくりに貢献することを定めており、「科学館事業」と「地域拠点事業」の大きな2つの柱で事業運営を行っている。科学館事業は展示やプラネタリウム、体験型教室といった活動を通じて「誰もが科学の楽しさを共に体験でき、科学リテラシーを高められる」科学館の中核をなす事業である。それに対し、地域拠点事業は「地域の人々が世代を超えて交流し、生涯学習や社会参画の場として活用できるよう、地域の交流拠点（ハブ）となること」を目指す、科学館が外の組織・人々と連携した事業である。この2つは独立したものではなく、モノのしくみを伝える展示のコーナーで地元企業が誇る技術を取り上げたり、地域の観察会をその



多摩六都科学館第2次基本計画より
多摩六都科学館の使命／活動理念と事業目標

フィールドで長年調査を行っている団体と行ったりと、どちらの要素も常に意識して取り込んでいる。

地域の人々とのつながりは、当館を拠点に活動する多摩六都科学館ボランティア会から始まったが、徐々に近隣の市の市民団体や学校・企業と協力する場面が増え、現在では様々な連携活動が展開されている。

新型コロナウイルスの感染拡大による 活動の変化と意外な困りごと

2020年2月末、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために当館も他の多くの博物館と同じく長期の臨時休館を余儀なくされた。ここで科学館ボランティアの活動はもちろん、市民団体の活動も、外出自粛に加えて公民館など活動場所としていた施設が閉鎖されたために、軒並みストップしてしまった。

正直なところ、2020年度前半は当館も自分たちの活動をどのように維持するかで手いっぱい、科学館ボランティアや市民団体とは近況を知らせ合う以上のことがほとんどできていなかった。2020年秋頃から状況を見つつ可能なところから活動を始める動きが出てきたが、ここで意外なことが活動の再開や継続のハードルになることがわかってきた。

1) 口座、アカウントなど、意外と大きかった個人の負担

多摩六都科学館では2014年から東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構と地域の市民との三者で連携した「農と食の体験塾」に取り組んでいる。東京都西東京市にある東京大学の農場の一部を使い、農学部の方や地域の農家の指導を受けて大豆の栽培に挑戦し、合わせて座学で研究者から野菜の栽培の歴史や農薬の使用法などを学ぶ講座である。運営の主体は三者による実行委員会で、講座・実習は大学、企画・運営の軸は市民、塾生募集や情報発信など事務局機能は科学館という役割になっている。2020年は先行きが何もわからなかったために実施見送りとしたが、2021年は緊急事態宣言下ではあったものの世間的にテレワークが普及してきていることから、オンライン講座として開講した。



オンラインでの「実物大豆図鑑」づくり
PCの調子が悪く自宅で受講できない人は科学館で
受講できるようにした

ところが、講義以前の事務手続きの段階でわかったのが、市民が個人で活動するときの負担の大きさだった。塾生募集や申込受付は例年通り当館で滞りなく進められたが、受講費の徴収の時点で躓いた。口座振り込みができるようにするには、実行委員の誰かが個人の名義で口座を開かなければならないのだ。市民の有志による組織なので、誰かが口座を開いてくれたとしてもその人がいずれ会から抜けることになった場合にその扱いに困ることが予想される。結局この時は現金書留を当館宛てに送ってもらうかたちで集金したが、日頃 ATM やネットバンキングで気軽に振り込みができていただけに、集金をする側になるとこのようなハードルがあるのは盲点だった。

また、オンライン講座であることを生かして実行委員会で「農と食の体験塾」の Facebook ページを作り、塾生と大豆の成長の様子や講義の感想を共有できる場を作ろうという話も出たが、これも任意団体がアカウントを作るには誰かしらの個人アカウントに紐づけしなければならないため、口座同様、断念した。

組織で当たり前のようにやっていることが、個人や有志ではままならない場面が意外と多いことがわかり、改めて日頃から精力的に市民活動に取り組まれている方々に頭の下がる思いだった。ただ、これをきっかけに、休館や活動縮小をせざるを得ない状況でもある程度安定した場や機能を提供できる当館が、地域の公共施設として協力すべきことは何かを意識するようになった。

2) 活動休止が生活リズムにも影響

市民団体に比べて科学館ボランティアには科学館という活動の拠点があり、活動資金や情報のやりとりにも当館が関わっているため、個人の負担はそれほど大きくならずにすんでいた。しかし、別の面で活動休止の影響が見られた。

多摩六都科学館のボランティア制度は 2000 年 12 月にスタートした。2021 年度の登録者は、大人 104 人、小学校 5 年生～高校生のジュニアボランティアが 28 人いる。ほとんどの大人ボランティアは当館が開館している火～日曜日のいずれかの曜日班に所属して、担当の曜日に展示室内の体験スペースで来館者と知恵の輪や様々なパズル



臨時休館前のボランティアの活動風景
ボランティアのコーナーは来館者から人気で、
いつから活動再開するか問い合わせが
寄せられることもある

をいっしょに解く、コミュニケーション主体の活動を行っている。ジュニアボランティアは土日祝日の活動が主で、科学館スタッフが行うプログラムの補佐や、大人ボランティア同様、体験スペースの運営などにあたっている。このように、多摩六都科学館のボランティアの活動は不特定多数の来館者とのコミュニケーションが主なため、感染リスクが高いとの判断から当館が最初の臨時休館に入る 1 週間前から活動休止となった。その後、科学館は感染防止対策をと

りながらの活動再開をしたが、ボランティアについては従来の来館者とのコミュニケーション主体の活動は未だ感染リスクが高いこと、またメンバーの多くが重症化のリスクが高い高齢者やワクチン接種の順番が遅い10代の子どもたちであることから、2021年12月の時点でもまだ活動休止は続いている。

ただ、科学館の活動が再開して、来館者とのコミュニケーションやボランティア同士が密になる環境を避ければ個人単位の活動は可能、としてからは、週に数人が当館を訪れるようになった。展示室の熱帯魚の水槽の水換えやビオトープのポンプの定期メンテナンスなど、休館前から続けていた自分の仕事をやりに来る人もいれば、スタッフが依頼した実験器具の作製をしに来てくれる人もいる。その中で、「特に用事はないんだけど、近くを通ったから」と、スタッフに声をかけて、近況を話していただく人も意外と多かった。活動休止が長くなりだしたところに、長年にわたって活動しているボランティアから「毎週、決まった曜日に科学館に行くことで生活リズムができていたのに、それが急になくなって落ち着かない」という声が寄せられたが、科学館に来て曜日班の活動をすることに留まらず、仲間やスタッフと会って話すことが多くのボランティアにとって日常の一部になっていたようだ。中には「毎週いっしょに活動していた1人暮らしのメンバーが、今どうしているか心配。近況を確認してもらえないか」といった相談もあった。

普通に開館しているときは表に見えやすい来館者に向けた活動に意識が向いていたが、その活動がなくなったことで、ボランティア同士の交流やそれぞれの人の生活リズムに科学館という存在が思った以上に大きな位置を占めていることを知ることができた。これはこのコロナ禍のなかでの大きな収穫だった。

3) 会えなくても変わらずに、つながり続けられるように

活動休止中、当館スタッフとボランティア役員・班リーダーの間や曜日班の中など、部分的なメールのやりとりはされていたが、ボランティア全体で情報交換できる場はなかった。そこで臨時休館のためストップしていた科学館の広報誌であるロクトニュースの発行を再開する際に、ニュースと共にスタッフ作製のボランティア便りを全員に郵送することとした。始まりはスタッフからの事務連絡と近況を書いた文字だけの便りだったが、その後ロクトニュースの発行に先がけてそれぞれの近況やボランティア全体に発信したいことを募集し、集まったメッセージをまとめて掲載するようにした。簡単な一言だけだったものが、回を重ねるごとにボランティアそれぞれの個性が現れた発信が増え、雨上がりに撮影した虹や散歩途中で見かけ



河野裕さん(金曜日班)
市村さんが「虹だよ」と知らせてくれて、お陰様で僕も車の空に大きな虹を見られました。写真を添付します。
ありがとうございます。
それにしても、あの虹は大きかったですね。車のボンネットがへこむかと思いました。



五十嵐さん(火曜日班)
私が通っている道で、面白い真っ盛り咲く、綺麗な花「オクラの花」。
増一私がホッとする花です。
この花と一緒に花火に夏を感じたいものです。

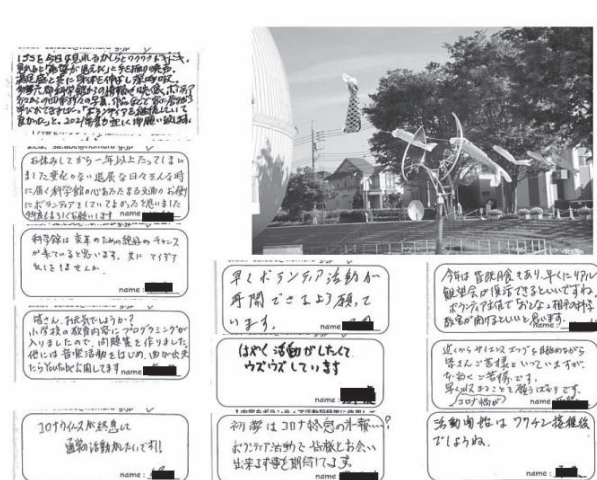


←堀石さん(日曜日班)作成の「ズル」。ハノイの塔を模倣にした感じのもの。
(受信未解決です)

ボランティア便り
散歩中に撮影した写真や、企画展のテーマに
合わせて考えたパズルなどが寄せられた

た野菜の花の写真、コロナ禍で作り始めたペーパークラフトの作品、おすすめの本の表紙など、大変にぎやかな紙面になっていた。また、書面で行ったボランティア総会や年度替わりのボランティア更新手続きの際には返信ハガキにメッセージ欄を設け、集まった直筆のコメントを集めた便りを出したところ、大変好評だった。

2か月ごとに送る紙のボランティア便りは大変アナログな連絡手段ではあったが、ボランティアそれぞれは離れていても、同じ科学館で活動する仲間としてつながっていることを感じられる、とても重要なコミュニケーションツールとなった。



ボランティア便り
直筆のメッセージと共に、毎年ボランティアが泳がせている鯉のぼりをスタッフが設営した様子を報告

新しい活動の形に向けて

ボランティアの活動休止の中、模型飛行機づくりに取り組むジュニアボランティアたちからオンラインで活動を続けたいとの要望が寄せられた。それまではジュニアボランティア数名とアドバイザーの大人ボランティア1、2名が科学館の会議室やホールに集まって、飛行機が飛ぶ原理の勉強や製作している模型飛行機の形状のチェック・改善などを行っていたが、科学館が臨時閉館してからは完全にストップしていた。しかし、長い外出自粛期間中にジュニアボランティアたちはオンラインでの授業も経験しており、このような案が出てくるのは自然な流れだったのかもしれない。ボランティア会の役員とボランティア担当のスタッフとで検討した結果、当館のZOOMアカウントを交流のプラットフォームとして提供し、活動を継続することとなった。PCのカメラ越しで少々不便ではあるが、休館前と同じような模型作りが進められるだけでなく、専門知識を持った大人とそれに興味を持つ中高生たちが世代を超えてつながる場も維持することができ、以前ほど行動がままならない中での新しいつながる場づくりにもなっているのではないと思う。



ジュニアボランティアの模型飛行機づくり
ZOOMでお互い自宅に進めた作業を
チェックし合い、改良を進めた

公共の施設＝博物館がそこにあることの意味

はじめにも述べたが、多摩六都科学館の基本理念には「活動の幅を広げ、皆さんをつなぎ、「地域づくり」に貢献することを目指します」との言葉が、また事業目標には東京の北多摩にある多摩六都というエリアの交流拠点として「地域の人々が世代を超えて交流し、生涯学習や社会参画の場として活用できるよう、地域の交流拠点（ハブ）となります」という言葉がある。科学館側は、「どうしたら地域づくりに貢献できるだろう」、「何をすればいいだろうか」と考えてきたが、コロナ禍という非常事態の中で最も市民活動やボランティアに貢献できたのは、いつもと変わらずに場（科学館）があり、窓口になる人がいて、組織として（個人では難しい）機能が果たせる、という平時と変わらない対応ができたことだったのではないかなと思う。多くのことに「今まで通り」が通用しない状況下で、少しでも「今まで通り」が保たれている場所・組織が機能していることで拠り所となる活動の軸のようなものが定まり、ボランティアや市民の緩い繋がりが壊れることなく続けてこられたのではないだろうか。ある種の交流拠点として機能できたのである。

多摩六都科学館は指定管理者制度を採用しており、現在の指定管理者の運営は2023年度までである。2年後には改めて指定管理者を定めることになるが、運営する会社・団体が変わろうとも科学館ボランティアや市民団体の活動は変わらず続いていく。運営者の事情で、地域の公共施設としての役割が失われてはならないのだ。ここで述べてきたような対応事項は、おそらく引継書に載せるほどではない些細なことがほとんどだが、現場レベルでのスタッフ間の引継ぎや、新たに市民団体と関係性を築く中で共有されるのが理想だろう。

約2年に渡る活動休止が続いていた多摩六都科学館のボランティア会も、2021年12月に久々に顔を合わせてのリーダー会議を開き、活動再開に向けての話し合いが始まった。以前のように活動したいという声は多く上がっているが、まだ当分の間はマスクなしの生活にもどれる見込みはなく、また新型コロナウイルスの感染による重症化リスクが高い人や活動休止中に健康状態が大きく変わった人もいることから、まずは焦らず、みんなが納得した活動のしかたが見えてくるまではじっくり話し合おうという段階である。状況が刻々と変わっていく時だからこそ、科学館が安定の軸となって、ボランティアや市民の新しい活動の形も維持できるよう、役割を担っていきたいと思う。



部分的なボランティアの活動再開
クイズラリー機の再開に向けて、モニター役で
エラーや使い勝手のチェックに協力